

『海外奇談』の語句の来歴と翻訳者

奥村 佳代子

Derivation of Phraseology in *Kaigai Kidan* and the Identity of the Translator

OKUMURA Kayoko

The Edo-period *yoruri* (narrative drama) work *Kanadehon Chushingura* (The Treasury of Loyal Retainers) was translated into Chinese twice in the course of the 18th century. The first of these translations was *Chushingura Engi* (An Adaptation of The Treasury of Loyal Retainers) by Shu Bunjiemon, a Chinese-Japanese interpreter in Nagasaki. The second translation, based on this text, was published as *Kaigai Kidan* (Tales of the Strange). The question of who produced this second translation has still not been clearly resolved. If the identity of the translator could be determined, it would enable a more accurate assessment of the value and unique qualities of the text itself, while at the same time shedding further light on the Japanese assimilation of Chinese language during the Edo period.

This paper builds on the author's prior research to take a fresh look at the derivation of the phraseology employed in *Kaigai Kidan* to analyze how certain characteristic phrases were incorporated into the text of the translation, and uses these derivations as the basis for offering the author's conjectures as to the authorship of this text.

1. 漢訳『海外奇談』とは

『海外奇談』は、1748（寛政元）年8月14日に初演された人形浄瑠璃作品『仮名手本忠臣蔵』を漢語訳したものであり、1815（文化12）年に初版が出版された。江戸時代だけでなく明治時代に至るまで再版され続け、原作の人氣が漢訳にも引き継がれていたことが推察される。

『海外奇談』は、『仮名手本忠臣蔵』から直接漢語に訳されたものではなく、長崎の唐通事であった周文次右衛門が翻訳した『忠臣蔵演義』をもとに、白話小説を模して訳し直されたものである。ただし、『海外奇談』の作者、つまり『忠臣蔵演義』をもとに『海外奇談』を完成させた人物については、いまだ判然としない。

『海外奇談』の題辞や見返りの記述、序文などには、一様に本書は日本の物語を中国で手に入れた「鴻濛陳人」なる中国人が、『水滸伝』の文体に倣って改作したものであると記されており、このことは、明治時代に出版された『支那小説譯解』（1898年、東海馬場讓得卿先生閱）に『水滸伝』や『西遊記』とならんで『海外奇談』が取り上げられていることから、当時は事実として受け入れられていた面があったらしいと考えざるをえない。

先行研究では、石崎（1940）をはじめ、『海外奇談』は中国人が『仮名手本忠臣蔵』を訳したものであるとする説には早くから疑義が呈され、序文を書いた江戸時代の儒者であり文人であった亀田鵬斎が本当の作者であり、中国人に仮託したものである、という見解が示された。香坂（1963）は、『海外奇談』の語彙を中国語学の立場から分析し、中国人とは関わりのない日本人の作品であり、亀田鵬斎こそがその日本人であると結論づけた。ただし、杉村（1985）によって、『忠臣蔵演義』の存在が指摘されたことにより、『海外奇談』が完成するまでの経緯はそれほど単純ではなく、亀田鵬斎翻訳説を再考する余地があることが示された。

筆者は、奥村（2002及び2007）で『海外奇談』の完成には日本人が関係していたという考えを述べ、奥村（2010）で『仮名手本忠臣蔵』から『忠臣蔵演義』へ、『忠臣蔵演義』から『海外奇談』への翻訳過程には複数の人間が存在していたという考えを述べた。本論は、筆者がこれまでに述べてきた考えを土台としており、『海外奇談』で用いられている語句の出自、つまりその語句はどこからきたのかという問題に関して新たな調査結果を加えたものであり、『仮名手本忠臣蔵』を中国白話小説体に翻訳した人物とその経緯を解明することを最終目的とした基礎的な作業に関する報告である。

2. 『海外奇談』の語句の出自

『海外奇談』が完成するまでの経緯を知るための試みとして、その語句がどのような出自を持つものであるかを、筆者がこれまでに言及したものも含めて次に挙げる。

2-1. 唐通事言葉

『早稲田大学図書館和漢図書分類目録』(六)の解説にあるように、『忠臣蔵演義』が『海外奇談』の原本であるとする見方に筆者も完全に同意する。『忠臣蔵演義』が書かれた年代は不詳だが、『海外奇談』が訳される前に、『忠臣蔵演義』がすでに訳されており、両者には影響関係があると考えられる根拠のひとつは、香坂(1963)によって問題があると指摘された語彙が、手がかりを与えてくれる。香坂(1963)の指摘する『海外奇談』の語彙の問題点14点のうち、以下に示す誤用とされた11点は『忠臣蔵演義』でも同じように用いられている。

1. 「因為」を「因此」の意味に誤用している。
2. 「早」と「快」とを混同している。
3. 「盡數」の誤用。
4. 「算」の誤用。
5. 「擡」の誤用。
6. 副詞と「是」の転倒。
7. 語順の誤り。
8. 是の省略。
9. 「箇麼」の使用。
10. 原因理由を示す「與」
11. 理由を問う「甚麼」

上に挙げた語彙の用法は、訳者が日本人であるがゆえの誤りではなく、『忠臣蔵演義』で使用されている語彙を使用した結果であると考えられる。

『忠臣蔵演義』を訳した周文次右衛門は、宮田(1979)によると唐通事としては低い家格の出身であったが、唐通事としての才能を認められ、破格の昇進を遂げた人物である。唐通事の話した中国語を、唐通事自らは唐話と称して中国人の話す官話と区別した。唐話は、中国人の話す官話と完全にはなかったかもしれないが、中国人との会話での使用に耐えうるだけの

言葉であった¹⁾。『海外奇談』の語句の出自のひとつで、『海外奇談』の土台となったものは、『忠臣蔵演義』を翻訳した唐通事周文次右衛門の唐話である。

2-2. 『小説字彙』の言葉

上述の香坂（1963）が指摘した『海外奇談』のその使用法に問題がある14点のうち、『忠臣蔵演義』と一致する11点を除く以下に挙げる3点は、18世紀末に出版された『小説字彙』に収録されており、その辞書に基づく解釈どおりに用いられている²⁾。

1. 「硬朗些」
2. 「阿陽」
3. 「較些子」

上の3語は、『忠臣蔵演義』では用いられておらず、『海外奇談』翻訳の際に加えられた語であると考えられる。秋水園主人編『小説字彙』は、江戸時代後期の1791年に出版された中国の様々な小説の語句を収めた画引き辞書であるが、『忠臣蔵演義』から書き換えられている部分は、この辞書に収録されている語句によって構成されている例を列挙することができる。たとえば、第5回には原文で「御石牌を建立せんとの催し。」と描かれている箇所があるが、『忠臣蔵演義』（上段）と『海外奇談』（下段）では、それぞれ次のように訳されている³⁾。

只推説造起石碑

只打了箇幌兒

『海外奇談』の「打了箇幌兒」は、『小説字彙』に収録されている語句であり、「カコツケヲ云」という語釈が施されている。

1) 『小孩児』（関西大学長澤文庫蔵）による。

2) 『小説字彙』は、鳥居久靖（1957）によると、編者秋水園主人が語句を収集し語釈を施したのではなく、「怯里馬赤」（写本、『唐話辞書類集』第1集所収）からその大部分を語句語釈も含めて借用している、という。ただし、『海外奇談』では『小説字彙』と同じく、「漆穿鷹嘴鉤搭魚腮」「不分皂伯」とあるが、「怯里馬赤」では、正しく「箭穿鷹嘴鉤搭魚腮」「不分皂伯」とあること、また語釈に関しては、たとえば、「軒刺的後生」は「怯里馬赤」に「カヒガヒシクリリシキヲ云」とあるのに対し、『小説字彙』では「リリシキ若モノ」である。『小説字彙』の語釈の方が『海外奇談』の該当箇所により合っていると言える。「將就些」は「怯里馬赤」では語釈が空欄になっているが、『小説字彙』では「ヨイカゲンニトウゾコウヅナリ」とあり、『海外奇談』には「ヨイカゲンニ」と左訓が施されている。さらに、「十字兒竹竿封着門」は「怯里馬赤」にはなく、『小説字彙』には収録されており「青竹ニテ門ヲトヂシメル」と語釈がある。『海外奇談』の「十字兒竹竿封着門」に左訓は施されていないが、例に挙げたこれらの語句からは『海外奇談』と関係があるのは『小説字彙』であると言えるだろう。「怯里馬赤」には、現在確認されている写本以前に、原本があったとも考えられるが、本論では言及しない。

3) 本論の引用文は、早稲田大学図書館所蔵『忠臣蔵演義』と拙蔵『日本忠臣庫』による。

また、第6回の原文の「泣ければ」が、『忠臣蔵演義』（上段）と『海外奇談』（下段）ではそれぞれ次のように訳されている。

大哭

撲簌々地成珠抛洒

『海外奇談』の「撲簌々地成珠抛洒」には「ナミダヲハラハラトナガシ」と左訓が施されているが、この語句は『小説字彙』では「撲簌々地成珠抛洒」と収録されており、語釈は「涙ヲバラバラトナガシ」である。

『小説字彙』の語句と『海外奇談』の語句との関係を見るため、下表に『海外奇談』第1回から第3回までの『忠臣蔵演義』では用いられていない語句で『小説字彙』に収録されている語句を列挙する⁴⁾。『小説字彙』は、筆者が所有する寛政3年刊のものをういた⁵⁾。左列は『海外奇談』の語句、中列は『小説字彙』の語釈、右列は『海外奇談』中当該語句にカナ書きで記された左訓である。左訓がない場合には、「なし」と記している。表中の二重線は各回の区切りを示す。

『海外奇談』でのみ用いられており『小説字彙』に収録されている語句一覧表

語句	『小説字彙』の語釈	『海外奇談』カナ書き
將就些	ヨイカゲンニトウゾコウゾナリ	ヨイカゲンニ
軟嗟奚的唆眼	イヤラシキ目ツキナリ	イヤラシイメツキヲシテ
眉花眼笑	エシヤクスルコト	なし
轉央	マタダノミ	マタダノミ
甑已破	トテモヌレタ袖ジャ	トテモヌレタソデジャ
一不成二不休	スルカラハシヌクト云コト又毒クハバサラト云ガ如シ	ドククラハバサラネブル
不題一聲兒	一言モモノライハヌ	なし
刁蹬	ワルモノモガリ	ムホウノ
乾頼	ソシラスカホシテイル	ソシラスカホデ
較些子	コレデコソ道理ニハ	カウナクテカナハヌハズ
大氣槩	大シンダイ	タイシン
憊頼	人ヲ罵ル辞・イガミ	イガミカカッテ

4) 奥村(2007)に、『忠臣蔵演義』にはなく『海外奇談』にのみある語句で『小説字彙』にも収録されている語句の一部を回ごとに提示したが、該当回を誤って表記しているものがあり不完全な表であるため、お詫びするとともにここで第1回から第3回に関しては訂正して掲載する。第4回から第10回に関してもあらためて訂正する予定である。

5) 本論で例示した『小説字彙』の語句はすべて拙蔵『書引小説字彙』（寛政三年辛亥十一月、皇都書林風月荘左衛門、大坂書林洪川與左衛門、同泉本八兵衛、同山口又一郎）による。

一遞一答説話	ウケツナガシツハナスナリ	ヤツツカヘシツ
丫頭	呉中呼女子賤者為丫頭也コシモト又コモノナド婢ヲ云	なし
窩盤	キゲントル	ヲダテル
古撒	昔カタ氣ナリ	カタクロシイ
羞澀	ハヂオソレ入シ兒ナリ	ハヅカシゲ
抹胸	ムネアテ	レ点・サスリ・ヲ
娘娘	ハハオヤ	なし
渴想得的	渴想得監コヒシウテタマラスナリ	コヒシウテナラス
軒跣刺の後生	リリシキ若モノ	リリシキ、ワカモノ
調眼色	メラミハセ	メラミアハセ
打藁	心ノウチニテトヤカクシアンスルコト	シアン
擠撮我年輕起來	擠撮我起來アナヅルコト	アナドリ
稠人	ヒトゴミ	オオゼイノナカニテ
頗奈	カンニンナラス	カンニンナラス
只得	ゼヒナク	ゼヒナク
多遭	イクタビカ	イクタビカ
軟弱	フガイナイ	フガイナク
不兜攬	アヒテナナラスコト	ナラズ・アイテニ
並然	カツフツ・曾テト同シ意	カツフツ
打磕摑	ネムル	ギョシンナレ
睏一睏	ネルコト	ネムルコト・ヒトネムリ
怎地	ドウシテ	なし
詫異	フシギナコト	ガテングユカヌ
况兼	ソノウヘ	ソノウヘ
鬼頭風發	イラツコト	キライラチ
尾行	シリニツクコト	シリニツクコト
十分顔色	キリヤウヨシ	なし
不啐瑠	ラチノアカスコト	キカスコト
說在熱鬧處	ハナシノサイ中	ハナシノサイチウ
彎着腰	カガメ	カガメ
停回	シバラク	シバラク
數落	ハヂカカス	ハヂカカス
丟個眼色	メクバセスルコト	メクバセシ
揆燈也似	揆燈也似拜インギンニ礼ヲスル形容ナリ	サシハサム
區區	スコシバカリ	スコシバカリ
一覘殼	スコシバカリ	なし
板板地	インギンナコト	インギンニ

遞	ワタスコト	ワタス
嚇痴了	驚テウッカリトナッタ	ウッカリト
裙釵	女ノ身ト云コトナリ	オンナノミデ
罣疑	フアン心ナリ	ココロカカリハ
寅夜	夜フケタルコトナリ	アケガタ
根不能風	云ニ心ノ中ニヤルセナイコトヲ形容シテ云フ	モドカシクテヤルセナク
熬一熬	心ノセクコト	ココロセクママ
喉極底	喉極の息ヲ切テ	イキガキレタ
啞嘴兒	クチナメズリ	クチナメズリシテ
消魂種	消魂種イノチトリメ	イノチトリメ
巴巴的	トリイソギテナリ	チョコチョコ
迎神出遊	マツリヲワタス	マツリヲワタシタイ
哎喲一聲	アレイトサケブコト	アレアレ
雪中送炭錦上添花	オリニサイワイト云フコト	オモフヤウニコトガイッタ
耶嚨	ハレヤレト云コト	ハレヤレ
歆艶	ウラヤムコト	ウラヤマシヒ
不分皂伯	アトサキナシ	アトサキナシニ
一穀輓	コロリ	コロリ
爭些兒	アブナヒカケンデ・スデノコトニ	アブナイコトノ
央告	ワビコトスル	ワビコトセヨ
賄囑	マイナイシテタノム	なし
稽遲	オソナハル	オソナハル
蠻奴才	イナカモノ	イナカモノ
多情種子	スイナ人	スイシテ
波俏	ワケシリスイナコト	ワケシリシテ
意意侶侶	キママスルコト	キママニシテ

語句が一致しているだけでは、その書物からの引用であるとは無論断定できないが、例えば『小説字彙』に誤った形で収録されている「漆穿鴈嘴鉤搭魚腮（正しくは、箭穿鴈嘴鉤搭魚腮）」や「不分皂伯（正しくは、不分皂伯）」が、同じ文字遣いで『海外奇談』で用いられていることから、『小説字彙』から引用したという推論を立てることは可能であると考えられる。

また、『海外奇談』には返り点が付されているが、語句の意味を記した左訓は限られており、その多くは『小説字彙』に収録されている語句に施されている。表に示したように、左訓の内容は『小説字彙』の語釈と表記の仕方も含めて一致するものが多く見られることから、『小説字彙』の語句は収録語彙と語釈の両方において『海外奇談』完成には欠かせない存在だったのではないかという推測が成り立つのではないだろうか。

日本語作品を、中国の小説に用いられている語句を使用して翻訳しようとする場合、個別の小説を繙くより、大量の小説から収録したとされる『小説字彙』を用いた方がより効率的であり、翻訳する際の作業として辞書類を用いることは不自然なことではなかろう。ただ、この推測に立つと、『小説字彙』の語釈とは一致しない左訓や、『小説字彙』にはない語句の使用こそが翻訳者は誰なのかを知る鍵となる問題として考える必要があるのだが、それに関しては別稿で改めて取り上げたいと考えており、本論では、『小説字彙』と一致しない部分が、どのように訳されているかを見ておきたい。

2-3. 訳者の作文能力に基づく言葉

『忠臣蔵演義』及び『小説字彙』との一致状況を示す箇所以外に、『海外奇談』の訳文には、次に挙げるように、単に既存の白話文や白話語句に置き換えたり、それらをつなぎ合わせたりするだけでは成し得ず、白話の知識と白話文を作文するだけの能力を有していることが示されていると考えられる箇所もある。この点に関しては奥村（2010）ですでに主な例を挙げた上で中国語法に則って分析を試みたため、ここではその他の例を挙げて補足しておきたい。各引用は、上段が『仮名手本忠臣蔵』、中段が『忠臣蔵演義』、下段が『海外奇談』である⁶⁾。

(1) 「袂から袂へ入るる結び文。顔に似合ぬ様参る武蔵鎧と書たるを。見るよりはっと思へども」(第1回)

甲活欲奶奶看了，是個情書。

甲活欲看了，不是兼好討詩的書，明明寫題武藏鎧子，卻是師直手澤的書。

(2) 「師直が口一つで五器提げふもしれぬあぶない身代。それでも武士と思ふじゃ」と。(第1回)

下官從三寸舌中，教你敗壞了家當也不見得。

全由下官三寸舌上，教你敗壞了家當也不見得，任地也你算做武夫麼。

(3) 「女小性が持出る。煙草輪を吹く雲を吹く。」(第2回)

只見一個女娘拿著煙盆。

只見一箇丫頭拿著芬盆，與本藏喫煙，煙氣濃濃作雲作輪。

(4) 「師直呼かけ」(第3回)

高野侯道

6) 『仮名手本忠臣蔵』の本文は日本古典文学大系51『浄瑠璃集』(1960年、岩波書店)所収「仮名手本忠臣蔵」による。

執政就地放做冷淡的腔子道

(5)「たった一人の娘に連添ふ聲じゃもの。不便にござる可愛ござる。」(第5回)

なし

許配愛女的佳婿，俺甚麼沒愛戚底心。

上に例示した箇所は、『仮名手本忠臣蔵』の描写を『忠臣蔵演義』ではごく簡潔に動作のみを訳す、あるいは省略して訳していないが、『海外奇談』では原文どおりに訳そうとしている。(4)はこの箇所だけを見ると、『海外奇談』は原文にはない語を訳しているようだが、冷たく詰る場面の雰囲気をつかりやすく描写しており、『海外奇談』が『仮名手本忠臣蔵』をより詳しく訳そうとしていることを表しているといえる。また、『海外奇談』の訳文は、でたらめに語句を並べているものではなく、白話による作文能力があると認められるだろう⁷⁾。

以上のように、言葉の出自という側面から『海外奇談』を見てみると、『海外奇談』の翻訳者は、『忠臣蔵演義』で訳されなかった原文があることを見極めることができ、多少の誤りがあることは否めないが、中国語(唐話)あるいは白話で作文することのできる程度の能力を持っていたと、推測することが可能である。

『忠臣蔵演義』にはなく『海外奇談』にはある部分は、白話小説の語を辞書に基づいて加えた箇所もあれば、翻訳者みずからが口語を模して作文したと見なしうる箇所もある。白話小説の語彙に頼るだけで、中国語(唐話)に対する知識をまったく持ち合わせていなかったとしたら、『海外奇談』を著わすことは不可能であったと考えられるのではないだろうか。

7) ただ、中国語法として疑問や違和感を与える点もある。

「把」に関しては、奥村(2010)でも触れたように、理解が曖昧なのか故意なのかが分からない箇所がある。「まだ其上に慥な事が有てや。手拭にぐるぐると巻いて懐に入らる。俺が着てゐる此一重物の嶋の切で拵へた金財布借たれば」(第6回)は、『忠臣蔵演義』では「更兼教他打點停當，老翁卻那五十塊，把手巾倦了一捲，將要放在懷裡，我說恐怕不停當，要放這個布袋，掛在他頸上，就是我所穿的棋盤布單衣，把切塊做個放金袋，借与他去，你們須要看他就要掛在頸上回來也。」と訳されているが、『海外奇談』では「更兼教你知一件做證的東西，老翁把那五十塊倦了手巾一捲，放在懷裡，我說這箇不停當，我應借與招財布，掛你項頸去，就是借與把我這穿著了柳條布單衣的襖補，做了招財布收去，你們須要看他九掛在項頸回來。」である。「把」の用法が『忠臣蔵演義』と『海外奇談』とは異なるが、理由はよくわからない。また、禁止を示す語の位置がおかしい箇所がある。「とばつて怪我仕やんな。」(第6回)は、『忠臣蔵演義』では「又不要手忙腳亂，誤傷身體。」と訳されており、「不要」以下の部分が禁止されており中国語の用法として自然だと言えるが、『海外奇談』では「手忙腳亂，勿誤傷身體。」とあり、「勿」で禁止されている内容が原文より狭められてしまったと言えるだろう。

よって、『海外奇談』の訳者として浮かび上がる人物像は以下の点にまとめることができるだろう。

1. 日本人（『仮名手本忠臣蔵』を理解できるだけの日本語能力を有している人物）
2. 中国白話小説に用いられた語句に詳しい人物
3. 唐話の知識があり、作文することのできる人物
4. 詩を作ることのできる人物

4に挙げた詩については、ここでは取り上げなかったが、『海外奇談』は白話小説を模した形式であり、随所に詩が登場しており、翻訳に際して欠かせない表現手段であったと考えられる。

3. 『海外奇談』を取り巻く人物

次に、上述の人物像をもとに、『海外奇談』の出版に直接的、間接的に関わった可能性のある人物を列挙していきたい。

1. 周文次右衛門（生年不詳-1826）

『忠臣蔵演義』の作者（『仮名手本忠臣蔵』の直接的な翻訳者）である。

2. 亀田鵬斎（1752-1826）

『海外奇談』の序文を書き、先行研究では『海外奇談』の作者であると見なされていたが、白話や中国語（唐話）に対する知識を示す資料は不明である。『仮名手本忠臣蔵』の題材である赤穂事件に関しては、「赤穂四十七義士碑」（文政3年）がある。亀田鵬斎と大田南畝との交流は、たとえば『一話一言』や『南畝集』に記されているが、共に酒を飲み詩を作っており、創作仲間でもあったようである。

3. 大田南畝（1749-1823）

長崎に行った経験があるのかどうか不明な亀田鵬斎に対し、周文次右衛門との直接の交流があったという点で、大田南畝もまた、『仮名手本忠臣蔵』の漢訳に関係する人物として挙げることができる。

大田南畝は、漢詩文、狂歌狂詩、洒落本などを創作した文人でもあり、幕府に仕えた役人でもあった。文化元年（1804）から文化二年にかけて支配勘定として長崎に赴任し、唐通事や清

人との交流があった。周文次右衛門とも親交があったことが、長崎在任中の日記から分かる⁸⁾。

唐船の船主は多く南京人にて、財副は福州人多し。故に福州の語は南京人に通ぜざること多し。されば福州人より南京人に対話するは、官話を以て談ず。俗語にては通じがたしと、唐通詞周文二右衛門の話 同日*三月十四日(『瓊浦雜綴』)

清人の頭に着たる帽は帽子といふ。紅の糸を紅纓といふ。毛に作りて纓なきを氈帽といふ。又睡帽といふもありと、訳司周文次右衛門かたる。(『瓊浦雜綴』)

また、大田南畝は唐通事が唐話で記した『訳家必備』を長崎に赴任する以前に江戸で手に入れており、長崎では唐通事の助けを得ながら、訳文も試みていたことが記されている。

唐通事彭城仁左衛門穎川仁十郎来唐話の事など承候。東都にて得候訳家必備、莊嶽唐話見せ候処、是通詞之初学に読候書のよし。段々訳文いたし候(長崎から江戸に住む息子の定吉に宛てた手紙)

蔵書リストからは、『訳家必備』の他に、唐通事が唐話で著した『小孩児』を自ら書写し所蔵していたことがわかる。

小孩児 訳司某

右小孩児一卷、崎陽訳司某所著也、借抄于訳司周文二右衛門氏家 書于岩原大芙蓉寓 乙丑閏八月三十一日、杏花園主人(『瓊浦遺珮』叢書細目)

このように、大田南畝は長崎赴任以前から唐話の書物を購入しており、具体的な勉強の成果を示す明確な資料を見いだせてはいないが、知識として唐話を多少は知っていた可能性がある。

4. 森島中良(1756頃-1810)

『忠臣蔵演義』の第一頁に「桂川之印」がある⁹⁾。これは、桂川中良つまり森島中良の蔵書であったことを示している。森島中良は『海外奇談』が出版される前の1809(文化6)年から1810(文化7)年にかけて、中国語の俗語を収集した「俗語解」を編纂した¹⁰⁾。「俗語解」に『小説字彙』が大きく影響したことはすでに指摘されているが、「俗語解」には『小説字彙』からの語句が多く取り入れられ、その中には『海外奇談』と一致する語句も多い¹¹⁾。森島中良には『警世通

8) 『瓊浦雜綴』『瓊浦遺珮』等大田南畝に関する引用は、岩波書店刊『大田南畝全集』第8巻(1987年)及び第19巻(1989年)に基づく。

9) 杉村(1979)に指摘されている。

10) 森島中良は、著名な蘭医の家系に生まれたが、戯作者、狂歌師として有名であり、ロシア語やオランダ語の語彙集の編纂に関わった人物としても知られている。「俗語解」は、巻1から巻4、巻11、巻12が写本として残されている。

11) 森島中良の「俗語解」については、岡田(1991)にその編纂方法が詳しく論じられている。『小説字彙』

言』への書き入れもあることから、白話小説に関心を持っており白話に対する知識があったと考えられるため、大田南畝と共に戯作者、狂歌師仲間でもあった森島中良が、『海外奇談』の翻訳に関わった可能性は否定できないだろう¹²⁾。

5. 来日長崎滞在清人

では、なぜ『仮名手本忠臣蔵』が漢訳の対象となったのかを考えるに、伏線となる人物がいたのではないかと想定できる。

大田南畝が長崎に赴任した文化元年より遡ること十年前後の寛政期に、陸明（名？）斎と孟涵九が来航している。当時、来航した中国人には、唐人屋敷という中国人のための居住空間が用意されており、市中での自由な宿泊や外出は許されず、全員唐人屋敷で過ごすことになっていた¹³⁾。唐人屋敷での日々が描かれている『長崎名勝圖繪』には、陸明斎が浄瑠璃を習い、孟涵九が仮名を書く図が描かれており、次のように記されている¹⁴⁾。

陸明斎は清朝浙江省の内乍浦の人なり交易のため安永のころより年々長崎に渡来し往還し
ばしばにして甚日本の風儀を好み乍浦の居宅も日本製の如く二階造りにして日本の畳を敷
日本の膳碗食具酒器を用ひ烹調料理の品味すべて日本の風を学び倣ふて客を饗応し又酒興
或は談話の折ふしには忠臣蔵の浄瑠璃一二句を口ずさみにすこれは大町といへる傾城より
習い得しとぞまた高砂の小謡を諷う

孟涵九は名は世燾字は涵九というこれもまた浙江省乍浦の人なり明斎よりはおよそ十年あ
まりも後なるべし寛政のころ長崎の館中にありて日本のいろは仮名を学んで古歌など臨摸
し書を乞う者あれば専らに書き与えけり

から取り入れられている語句で『海外奇談』に用いられている語句は、たとえば、「一時・一口遊・一搭
兒・一蜺殻・一佛出世二佛涅槃・一個霹靂空中去・大気概・小犬・小鬼頭・不題一聲兒・不死也魂消・不
吃回頭草・水戸の行徑・火國的腔調・軟腿膜的俊眼（『海外奇談』では「峻」に作る）・硬朗些・惑突的・
一頓亂搶・二婚頭・大頭兒・大後响・小路抄轉・火塊也似熱・心花也開了・必定我此首領一轂輓・毛團把
戲・莊事兒・添上一頂愁帽兒・十字兒竹竿封着門・猩判」などがある。

12) 石上(1995)は第8節「晩年の文事—『俗語解』を中心に—」の251頁で「私見に拠れば、『仮名手本忠臣蔵』の漢訳本『海外奇談』も中良の手に成った可能性をもつ」と述べておられる。森島中良の「俗語解」は『唐話辞書類集』第11集に所収されている。わずかな例だが、「通与アタエル、ワタス」（『唐話辞書類集』第11集950頁）や「喝道行列ノ先従士ナリハイホウサキノケ也」（同1057頁）のように、『小説字彙』にはなく「俗語解」にある語句で『海外奇談』にも用いられている語句がある。

13) 唐人屋敷は元禄2年（1689）に開設された。一般の日本人の出入りは許されなかったが、唐通事ら幕府の役人、遊女には出入りが許されていた。大田南畝も支配勘定として滞在中には訪れた経験がある。

14) 長崎史談会『長崎名勝圖繪』p. 239から243頁。

ここに登場する陸明斎と孟涵九という二人の中国人は、日本趣味の清人であった。陸明斎は、大町という遊女に忠臣蔵を教わったとあり、唐通事周文次右衛門から教わったのではなかったが、来航清人の中に日本の文芸作品に興味を持つ人物がいたということは、『仮名手本忠臣蔵』が中国語に訳される素地が出来ていたことを示していると言えるだろう。『忠臣蔵演義』は『仮名手本忠臣蔵』を中国人のために訳してあげたことが始まりであったのではないだろうか。

『忠臣蔵演義』には、『仮名手本忠臣蔵』には記述のない、中国人に説明していると考えられる箇所がある。

拿了旁邊の短刀。早抜刀在手。從書院裡下去。拿了單草鞋抹著。我朝傍無磨石。將草鞋抹著。當做磨刀石¹⁵⁾。

這是紫摩黃金。我朝柳條是紫摩的同音。雖是字不同而同音。借此二字就算做紫摩黃金¹⁶⁾。

「我朝」と述べている点から、日本人（唐通事）が中国人に対して解説している、ということがわかるだろう。つまり、『忠臣蔵演義』はもともとは唐通事が来航清人のために訳したものであったことを示しているといえるだろう。この部分は、『海外奇談』では次のように改められている。

把短刀快脫鞘在手。從書院裡下去。拿了那草鞋抹著。倭人傍無磨石。將草鞋抹著。當做磨刀石。

邦俗呼柳條如紫摩。文字各異而訓同音。借此義叫做紫摩黃金。

『海外奇談』ではそれぞれ「倭人」「邦俗」と言い換え、あたかも中国人が中国人に対して説明しているかのように訳し直している。『海外奇談』を中国人翻訳とするために修正したと考えられるだろう。

『忠臣蔵演義』に原文にはない解説を加えた経緯は、明記されていないが、浄瑠璃に興味を持った中国人のために『仮名手本忠臣蔵』を訳した際に、便宜を図ったという事情があったと考えられる。『忠臣蔵演義』が訳されたそもそものきっかけは、最初から『海外奇談』という作品の完成を目指していたのではなく、日本趣味の来航清人の要望だったのではないだろうか。

4. まとめ

『海外奇談』の成立に欠かせなかった人物は、その原本である『忠臣蔵演義』を訳した周文次右衛門をまず挙げることができる。『海外奇談』は、周文次右衛門を含む複数の人物の手によ

15) 『仮名手本忠臣蔵』の原文は「(御覧に入ると) 御傍の。小刀抜より早く書院なる。召替へ草履かたし片手の早ねた刃」(第二段、302頁)。

16) 『仮名手本忠臣蔵』の原文は「此金は嶋の財布の紫摩黄金仏果を得よと云ければ」(第六段、336頁)。

て完成された作品であると思われ、関係したと考えられる人物を残らず挙げ、誰がどのような役割を果たしたのかを検討していくことが、成立の過程を明らかにすることに繋がるだろう。『仮名手本忠臣蔵』から『海外奇談』の成立に至る経緯には複数の人物が関わっており、一人の翻訳者によるものではなかったのではないだろうか。

『海外奇談』は、『仮名手本忠臣蔵』を中国語（唐話）訳した『忠臣蔵演義』をもとに、白話語句に置き換えたり、白話語句を新たに付け加えた部分と、翻訳者によって作文された部分とから構成されていると考えられる。

先行研究で『海外奇談』の訳者であるとされた亀田鵬斎は、白話文を自力で作りに上げるのが出来たかという点で、訳者とするには疑わしい。

大田南畝は、唐話の日本語訳を試み、長崎駐在を経て周文次右衛門と知り合い交流していたことから、『忠臣蔵演義』と『海外奇談』の橋渡しの関与をしたのではないかと想像できるが、決定的な証拠がない。また、白話を作成する能力があったかどうかは不明である。

亀田鵬斎、大田南畝が、詩の作成に関与したかどうかは、二人が文人としての一面を持ち、漢詩や狂詩も創作していたことから大いに可能性があると考えられるが、詩そのものから二人の関わりを見出すことが今後の課題である。

森島中良は、『小説字彙』を読み俗語を学んだだけでなく、白話小説を読んでおり白話の知識があったと考えられることから、『忠臣蔵演義』から『海外奇談』に訳し直した中心的人物として有力候補である。「俗語解」の編纂中に、『海外奇談』翻訳に関与したかどうかを、さらに調査していく必要があるだろう。

参考文献

- 石崎又造 1940『近世日本に於ける支那俗語文学史』清水弘文堂書房
 鳥居久靖 1954「秋水園主人『小説字彙』をめぐって」『天理大学学報』第16輯所収。
 鳥居久靖 1957「日本人編纂中国俗語辞書の若干について」『天理大学学報』第23輯。
 香坂順一 1963「『海外奇談』の訳者—唐話の性格—」『白話語彙の研究』（光生館、）所収
 杉村英治 1979「海外奇談—漢訳仮名手本忠臣蔵—」『亀田鵬斎の世界』（1985年、三樹書房）所収。
 宮田安 1979『唐通事家系論攷』長崎文献社。
 岡田袈裟男 1991「中日辞書の構想—『俗語解』改編と方法—」（「森島中良と『俗語解』改編—静嘉堂文庫所蔵『俗語解』をめぐって」（1982年国語学会春季大会発表要旨の一部をもとに改稿）『江戸の翻訳空間—蘭語・唐話語彙の表出機構』笠間書院所収（2006『江戸の翻訳空間—蘭語・唐話語彙の表出機構 [新訂版]』笠間書院所収）。
 石上敏 1995『万象亭森島中良の文事』翰林書房。
 奥村佳代子 2007『江戸時代の唐話に関する基礎研究』関西大学東西学術研究所研究叢書28、関西大学出版部。
 奥村佳代子 2010「亀田鵬斎と『海外奇談』」関西大学『アジア文化交流研究』第5号所収。